

第5回 日本消化管 Virtual Reality 学会 総会・学術集会
参加報告

小樽掖済会病院 平野雄士

お久しぶりです。今回は2023年1月21日(土)に順天堂大学の有山登メモリアルホールで行われた第5回日本消化管 Virtual Reality 学会の報告をさせていただきます。順天堂大学医学部消化器内科教授の永原章仁大会長の指揮のもと現地開催とZOOMを合わせたハイブリッドにて開催されました。久しぶりの現地開催のためか、一般演題も13演題と多数集まりました。

過去には大腸CT(CTC)の演題がほとんどでしたが、今回は人工知能(AI)を用いた演題やcine MRIを用いたもの、胃や小腸に関するものなど多方向にVRを駆使した演題が報告されました。CTCに関するものでは、内視鏡では見過ごされた病変がCTCで指摘され治療に至った症例、アミロイドーシスの症例報告、CTCでわかる虫垂病変、大腸がんの環周率についてなど、興味深い報告が沢山ありました。さらに、前処置についての新しい試みや、大腸CT専門技師認定制度の報告等々。

私は一般演題の座長を任されたので、演題数が多く多種多様(しかもcine MRまで、)なことに当初は困ったなと思っていましたが、演題がしっかり検討され機知に富んでいたため面白く、あっという間に時間が過ぎた感じです。

北海道からは当院の佐藤哲太技師が『仮想大腸展開像における隆起性病変の自動検出の試み』というディープラーニングを用いた報告をしました。かなり精度の高いAIの開発を進めているので、道内でもどこかで報告してもらいたいと思います。

シンポジウムは『CTC普及のための課題とその解決に向けて』と題して、2名の司会者と5名のディスカッサント(討議者)により意見交換がなされました。告示研修をはじめ認定講習など診療放射線技師は準備が整いつつありますが、消化器内科医、放射線科医の中ではCTCの現状の理解に相違があり、もっと発信していくことが大事であると感じました。

そのほかに3講演が組まれており、最後の講演は『MR エンテログラフィー』でした。炎症性腸疾患は傾向として若年者が多いことから被ばくのないMRIが用いられて、動態にて観察するなどしています。当院でもトライしてみたい内容でした。

次回は2024年1月に小林広幸先生が大会長となり福岡で開催されます。是非、興味をもっていただき参加して頂きたいと思います。

日本消化管VR学会 [日本消化管 Virtual Reality 学会 \(jgvra.jp\)](http://jgvra.jp)